

社長介護記

平成 19 年 1 2 月

和田 宏

社長を暴れないように布で包んで、口を開かせ野菜ジュースと栄養ドリンクを混ぜた液をチューブを使って流し込む、次は薬である、体重を基準に計算した抗生物質錠の破片を舌の上に乗せる、嫌がること無く飲み込んでくれるのでほっとする、続けて食事です、きざみ菜、蒸し芋、削り節、を練り合わせた物を飲みこみ易い形にして口に入れてやる、時々ドリンク剤で嚥下を助ける事も忘れない、ウェットティッシュで口の周りの残滓を拭う、もう一つ、頰骨の曲がり矯正指圧を約 5 分間施してケージに入れ照明を暗くして睡眠に誘う、家族の協力を得て 4 時間毎に行う、これが 1 1 月中続けたチャボの社長君の介護度 5 の概要です。

12 月になって容態は可なり好転した、投薬は仕方ないとして餌と水は何とか食べられる、嗅覚が頼りなので菜っ葉を入れておくとその臭いに釣られて穀物も食べられるようだ、一日を通して耐えている姿の時間よりリラックスしている姿の時間が永くなった、そして毎日ではないがコケコッコウと啼くまで回復した、何の見込みも無かったが唯一見つけたことを続けてここまでたどり着けた事を喜んでいる今日この頃です。

社長は 6 歳の桂チャボの雄鶏である、ニックネームは我が家で一番小さく（体重は 650 g r）新米なのに姿勢、態度とも威厳があるからである。

今回の体調不良は少し寒さを感じるようになった 10 月下旬の朝、止まり木から落ちて苦しそうにバタバタと暴れたことから始まった。

観察すると、首が反ってしなやかさを失いバランスが取れない、従って立てない、呼吸も難しくなる、対症方法は布で首を拘束して矯正し翼と足も拘束してばたばた出来ないようにすれば床に転がして置ける、アリナミンドリンクをストローで飲ませて様子を見ていた、更に 2 日目から風邪薬を加えてみたが効果なし、その日の夕刻獣医に診せようと電話したが急患は嫌われるのか 2 軒断られ 3 軒目は OK だったが 8 k m ドライブして行ったのにロビーで断られた、その時の症状は首反りと緑便であったが便は野菜ジュースの性であろう、

仕方なく薬のストックを調べたら抗生物質を発見、これに頼るしか方法はないと感じたが問題は量である、体重比だと 100 分の 1 であるから 1 錠を三十片に砕いて日に 6 回から 8 回投与する事にした、以来発症から 2 ヶ月頑張っって何とか前述の状態になったのである。

彼が我が家にやってきたのは 5 年前の晩秋であった、佐鳴湖公園に捨てられてカモメ、ドバト、と餌を奪い合い、野良猫の脅威に曝されていた、体重 500 g r 肉は落ちて血痕も幾つか有りやっと生きていたらしい、4 っ日間は静かだったので啼かない鶏かと思いきや次の日から賑やかになった、体力が回復したのだ、羽虫も酷かったが頭部にレジ袋を被せて防虫剤を軽くスプレーしたら OK、足は瘡蓋だらけでしたが水虫の薬を数回塗ったら黄色い足が見えてきた、1 ヶ月で白い羽、黒い尾羽の凶鑑に紹介されている通りの桂チャボになった、飛翔力は流石で放し飼いでいると夕刻は物干し竿で眠っていた、当時我が家には老柴犬がいたので社長は人間及び犬と付き合う事を身に着けた、殆ど目が見えない柴犬が道路へ出るとヒーヨヒーヨと大声で鳴いて報せる、これは大変役に立った。老犬が 3 年前に亡くなってからは野良猫が多いので小屋飼いにした、それからは

人間に要求するようになった、水がない餌がないと前記のヒーヨヒーヨで報せる、

その社長も昨年の春から元気がなくなったので先ず考えたのは仲間との交流である、幼稚園のチャボ舎に朝早く連れて行く、フェンスの内外とも雄は本能的に臨戦態勢、興奮して収まりがつかないほどであった、然しチャボ舎がテロの標的となり突然空になり交流は終わった。

今年の1月からは寒さが応える感じなので夜は家に入れて凌いだ、秋を感じさせる10月下旬そろそろ満6歳になる社長、視力は明るさが分かる程度に低下、幸い嗅覚と聴覚は略OK、換羽は順調で冬羽は生えてきたが冬を如何に乗り切るかと考え始めたばかりなのに首記の事態になってしまった。

今朝も寒い、12月も下旬だから当然です、彼の体調は“低空飛行“である、薬と餌を、そして首全体をしても首が反り気味で耐えている、然し彼は”啼く“、全身の力を集中して、これは見ている者に感動を与える、彼は男として生き続けている、我々も、年配面をして昔話をするより、今日何をしたか何が出来るか、黙ってさりげなく見せたいものだ。

以上

写真を添付します、昨年11月撮影です、

現在のは尾羽を治療の都合上切たので格好が悪いからです。

